社会科

総合学習　生徒と共に学ぶ「アメラジアン」

ー高２沖縄研究旅行と総合人間科の中でー

丸　山　　豊

【抄録】
1．アメラジアン問題とは
2．沖縄から世界を学ぶ
3．アメラジアンて何だ？
4．疑問点を出し合う
5．アメラジアンスクールへの質問内容
6．アメラジアンスクールから学ぶ
7．沖縄研究旅行での「平和メッセージ」から
8．行動に移した生徒たち
9．人生選択への関わり
10．自分が変わった
11．真の「国際理解教育」とは

【キーワード】　アメラジアン　アメラジアンスクール・インオキナワ　国際理解教育　ユネスコ

1．アメラジアン問題とは

本校の修学旅行は、生徒の主体的な研究を目的とした研究旅行と名称を変更し、その目的地を沖縄に選んで本年度で10年目となる。本論では1998年度に取り組んだ沖縄の「アメラジアン」問題で生徒が何を学んだかを報告したい。

米軍基地が約75パーセントを占める沖縄では、アメリカ兵、及び軍関係の男性と日本人の女性に生まれた、いわゆる「ハーフ」（この表現は半分ずつという意味でふさわしくない）の子どもたちが推定で千人以上沖縄で暮らしているいわれる。「アメラジアン」とはこうした混血児を意味する新しい用語である。彼らの多くは日本語中心の生活のため多くはアメリカ人の父親とコミュニケーションがとれない悩みを抱えている。「ガイジンのくせに英語もできないの」といった差別やコンプレックスに打ち勝ちアメラジアンとして自信をもって生きたいとの理由で米軍基地内の学校やインターナショナルスクールに通ってきた。しかし、基地内学校へは現役の軍人は授業料等無料に近く優遇されているが、多くのアメラジアンの父親は退役軍人であったり、離婚して通学の権利を失うなど経済的な負担も多いばかりか、公立学校に戻るにもカリキュラムやいじめの問題などから戻りにくい状況が続いた。そこで母親たちが中心となって「アメラジアンの子どもたちが自由に学べる学校づくり」の運動を始めた。こうしてフリースクール形態としての「アメラジアンスクール」が沖縄宜野湾市に誕生したのが1998年６月である。アメラジアンが突きつけるこれら一連の問題は教育に留まらず、女性の問題、基地、平和の問題から国家の在り方に及ぶ。

本論ではこうしたアメラジアンの提起する問題の是非を問うのではなく、生徒たちがこの問題を本校が実践している総合人間科（総合学習）の中で自らのテーマとして取り上げ、沖縄に出かけてアメラジアンスクールを実際に訪れ、アメラジアンの子どもたちとふれあう中で、何を掴んでいったのかを考えるものである。

2．沖縄から世界を学ぶーテーマ授業からー

本校が実践している総合学習教科「総合人間科」では、高校２年生は「平和・国際理解・人権」をテーマに、フィールドワークを沖縄として一年間学習している。1998年度も11月に沖縄へ３泊４日で出かけた。４月当初から土曜日の３～４限を「総合人間科」としてカリキュラムを組み学習を開始した。一学期は「沖縄から世界を考える」を目標に生徒による授業実践（テーマ授業）を行った。生徒が取り上げたテーマは次の通りである。

テーマ授業　沖縄から世界を考える	
国際理解	沖縄の米軍基地 日本の基地研究
人権	差別と人権 安保条約、地位協定
平和	ナチス ガイドライン 沖縄における皇民化教育
民族・文化	琉球文化 イスラムの人々 食文化 沖縄の踊り
自然、産業	星座 沖縄の動物 パイナップル 珊瑚礁の危機 沖縄のリゾート開発

テーマの設定については「平和・国際理解・人権」を中心に生徒と教官で話し合いながら設定する。しかし、青い海と真っ赤なハイビスカスにあこがれる生徒にとってこのテーマ設定は抵抗があるのも事実である。

このテーマ授業は玉石混淆で、単に何冊かの書物の引き写しから、アンケート等を利用した実態調査に基づく内容に至る様々な展開がなされた。これは沖縄研究旅行へ向けての「動機付け」であり、グループワークの導入のねらいでもある。こうして高まった沖縄への関心は、現地でのフィールドワークの目的地選び、すなわち沖縄のどこへ出かけ、何をテーマに実地調査をするのかという新たな課題へ意欲を呼び起こすという教官側のねらいがある。

全てスムーズに事は運ばないが、意外な展開を見せて意義のある実践として定着している。

3．アメラジアンて何だ？

2学期新たな研究グループが発足し、第1回の会合を持った。私が担当したグループは（男子3名、女子4名の計7名）だった。高校生のグループワークは特に難しい。テーマを軸にメンバーが組まれてないのと同一クラスの枠内であり、しかも男女混合、沖縄旅行での生活班も兼ねるという仲良しグループであり、問題意識を一本化する事の困難さは目に見えていた。その中で、伝統工芸、又は軍事基地に対する影響調査に絞られていったが一学期のテーマ授業の枠を越えられなかった。

「アメラジアンについてやってみたい」という生徒の声に、私は「アメラジアン？」と聞き返したくらいの知識しか持ち合わせていなかった。「そうそう、ハーフがいい」と賛同の声が挙がる。「ハーフってその言葉の響き自体に差別があるのでは？」とたたみ込む私に「先生ハーフは高校生のあこがれでもあるんだよ」と返され思わず言葉を失った。一方で「英語の時間にアメラジアンについて勉強したんだから」「沖縄女性の差別問題でもある」という。

自分の勉強不足を悟り早速英語科のN先生から教材で使ったという新聞の切り抜き記事を手に入れた。1998年6月13日の「中日新聞」で「沖縄のアメラジアンの子どもたち」の記事、同じく「ごみ列島」の中で沖縄読谷村のゴミ処分場跡地に建てられたクリスチャンスクールで、悪臭を伴う水蒸気噴出が児童に被害を及ぼした問題が英語の教科で取り上げられていたことが分かった。

アメラジアン問題は生徒から動機付けを得て、こうしてスタートした。

（1）生徒の当初の動機

生徒たちの軽いノリでテーマは決定したが、何から調べていくか、どこへ訪問したらいいのか全く暗中模索の状態が続いた。脱日本人にあこがれて自ら実践し表現している高校生にとって、アメリカ兵と日本女性の間に産まれた子どもはハーフと呼ぶあこがれはあっても、アメラジアンを基本的人権の問題として捉えることができるのか、生徒のいい加減な事前学習ではかえって差別感を助長してしまうのではという心配が先に立った。案の定、当初の動機は、新しいテーマに対する興味本位であり伝統工芸にこだわる者もいて、班員7名がまとまっていたわけではなかった。提出されたテーマの動機は次のように書かれていた。

「テレビで観たアメラジアン問題に興味を持ったこと、英語のリーダーの授業で、この問題について勉強し、私たちが考えていくべき問題だと思ったから。アメラジアンと呼ばれるアメリカ人と日本人（主にアメリカ兵と日本女性）の子どもへの差別、沖縄の人々のアメリカ人に対する意識、その時代の移り変わりを調べる。」と。

（2）事前学習として

①上里和美著『アメラジアン』を読む

まず、事前学習として上里和美著『アメラジアン－もう一つの沖縄－』（かもがわ出版1998年）を8冊購入した。グループ一人一冊である。この読書会を持つに当たって、私自身の新たな問題意識を含めて生徒に次のような課題を与えた。

沖縄での差別問題　－アメラジアンの教育－

沖縄研究旅行で本校生徒は、今までにも多くの沖縄の差別問題をテーマに取り上げてきた。その中身は沖縄を本土からの、アメリカからの、また歴史の視点から被害者として差別問題を考えるものばかりであった。つまり、差別された沖縄を浮き彫りにするものである。しかし、今回のアメラジアンは沖縄そのものが彼ら（アメラジアン）を差別する問題としてとらえたい。被害者としての沖縄がこの問題では加害者になっていく実態がある。また、ひいては日本国民がその実態を知らないが故に差別に加担していることすら理解されない。アメラジアン問題にはこうした二重構造が存在する。

アメラジアンに対する我々の無意識の差別を明らかにしたい。日本とは何か、国籍とは何かを問いかける問題と日本国民にこだわらない一人の人間としての基本的人権問題として考えていく姿勢をアメラジアンスクール訪問でひとり一人持ってほしい。

比較的読書経験のない生徒も含めて『アメラジアン』の講読はスムーズに進んだ。
「調べていくうちに、子どもに対する差別は理屈抜きでかわいそうだと思ったけれど、教育権に関することは疑問が深まるばかりだった」と述べている。つまり、悲惨な結果が分かっているのになぜ米兵との関係を持つのかという女性（母親）への疑問と「日本の公教育が保障されているのになぜ」という疑問である。また、「ハーフだとカッコいいと思っていたし、名古屋だと一目置かれるけど、この本を読んでもっと沖縄に深いことがあると思った。そこを知りたい」など素朴な感想が出されていった。

②アメラジアンスクールへの訪問依頼

アメラジアンスクールの存在をおおかたの生徒もこの本を通して知ることになった。沖縄研究旅行の訪問先は「アメラジアンスクール」で一致し、早速アポイントメントをとることになった。

代表のセイヤー・ミドリさんは私たちの申し出を快く受け入れてくれたばかりか、アメラジアンスクールに対するいろいろな資料を送って下さった。興味本位の訪問は子どもたちを傷つけることになる、という指摘に生徒たちの姿勢は大きく変化していった。アメラジアンスクールが同情の存在から子どもの権利、女性の生き方、平和、教育権といった幅広い学習の場として考え始める契機となった。

③読後、生徒の問題意識は変化したのか

「沖縄の女性とアメリカ軍人の子どもであるアメラジアンの人権、教育権の問題だけでなく、若い女性が米軍基地の中にあるクラブなどに自分から積極的に入り込んで、男性と関係を持つという事実にも深く関心をもった。」とあるように、『アメラジアン－もう一つの沖縄－』に描かれない部分に関心を示す生徒もあった。自分と同世代の異性感覚を問題にしたかったのではないか。しかし、これらの問題を個人的な行動として捉えるのではなく、国家の問題として考えていく姿勢は出てきたようである。つまり、アメラジアンの問題を「沖縄だけの問題ではなく、沖縄以外の日本中にどこにでもおきる」ことであり「日本とアジアの国々の問題、アメリカと他の国との間で起こりうる深刻な問題」として考えている。同時に沖縄以外の土地に住む生徒にとって「アメラジアンは深刻な問題として」素直に受け入れることができるが、果たして「沖縄の人はどれだけこの問題を理解し、どれだけの意識をもっているのか」という疑問も指摘している。

生徒の心情としては、つぎのような感想が共通部分である。
「だだ、漠然として今の自分を振り返った。まだ、10歳や15歳の小さな子どもたちにとって、この問題は辛く、深刻なのであろう。まだ自分を取りまくこの問題を理解できない子どももいると思う。そういった子どもたちが肌の色が違う、目の色が違うからといって辛い日々を送っている。こういう事は理屈抜きで嫌なことだし辛いことだと思う。少しでも多くの確実な事実と現状を理解して、この問題を考えていきたいと思う。」
「本の中の出来事を自分の目で確かめること」単純だが、一番根本的な部分でグループ７名の問題意識は固まった。

４．疑問点を出し合う

読後の感想、スクールから送られてきた新聞の切り抜きなどの情報を整理しながら生徒たちと話し合い、私自身の問題意識を含めて疑問点を次のように整理していった。
まず、法律ではどうなっているのか、次にアメラジアンについての疑問と問題点を出し合った。これは生徒にとっては大変な作業であった。この段階で生徒たちは「大変なテーマにとりくんでしまったな」というのが正直な感想だろう。

指導教官としてはいかに生徒の問題意識を深く掘り下げるかが課題となった。こうしてかなり強力な指導のもとにこうして第一次のアメラジアンに対する疑問と課題をまとめた。

法律上のどうなっているのか

日本……国籍法（1994）第14条外国の国籍を有する日本国民は外国および日本の国籍を有することとなった時が二十歳に達する以前であるときは二十二歳に達するまでにいずれかの国籍を選択しなければならない。

疑問に思ったこと

1　ハーフとダブルの違い
2　アメラジアンの定義はどう考えるのか
3　アメリカ兵とアジアの女性まで広げるのか
4　アメリカの教育責任はないのか
5　他国の二重国籍児童、生徒の教育権はどうなっているのか※
6　ヨーロッパで米兵とドイツ女性の間に生まれた子どもはどうなっているのか※
7　沖縄との違いがあるのか、もしあるとすると米国の沖縄差別ではないか

8　日本語教育、日本文化の理解もアメラジアンスクールではどう取り上げるのか
9　「日本の学校へ行けばいいんだ」という声はごく自然とも思えるが。
10　沖縄の子どもが「ヤンキーゴーホーム」と言うときの気持ちにあるもの
11　日本の近代史（沖縄戦を含めて）をアメラジアンとしてどう学ぶのか
12　基地問題をアメラジアンの立場から考えたらどうなのか、アメラジアンの故郷は基地という発言を聞いたことがある。
13　日本国憲法の義務教育の考え方とアメラジアンスクールの立場は
14　反基地感情がアメラジアンへの差別を生むのか。
15　本土の高校生は「ハーフ」にあこがれている。差別はないのでは。沖縄の高校生たちも同じでは。
16　なぜ本土の高校生はハーフにあこがれるのか、
17　アメラジアンスクールで何を学んで帰ってくるのか
18　スクールのカリキュラムはどうなっているのか
19　日本本土にいる国際結婚の子どもたちの教育についてアメラジアンスクールの父母たちはどう考えるのか
20　米軍基地内の学校への通学要望は基地を認めることにならないか※
21　日本での生活力をきちんと付けさせる必要はないか、
22　アメリカに逃避していると受けとられることはないか
23　アメラジアンの子どもたちの生の声（どんな学校で何を勉強したいのか、将来どこでどんな生き方を望んでいるのか）を聞く。親の望みとの違いはないのか
24　アメラジアンの抱くコンプレックスとは何か
25　日系アメリカ人またはアメリカ系日本人という意識が日本人にない。つまり単一民族と思いこんでいるところに問題あり。※
26　民族問題ととらえるならアイヌ、在日韓国人・朝鮮人、日系ブラジル人の教育権はどうなっているのか※
27　沖縄は差別されているという被害者意識だけでは差別はなくならない。アメラジアンにたいする差別の加害者としての意識から理解すること
28　日本人男性がアジアで女性を金で買い、その結果多数の日系のアジア人が生まれている。そのこどもたちに日本政府は何をなすべきか
29　国籍に対する日本の伝統的な考えは、血のつながりの重視である。日本は二重国籍を法的に認めているのか※
30　米兵の日本人女性に対する意識に問題はないか
31　アメラジアンの教育権を子どもの権利条約から考えられるか。
32　朝鮮中・高校の子どもたちの権利を認めていないがアメラジアンスクールと共通していないか。※
33　アメラジアンの母国語は日本語と英語というが。「英語が話せない」これは言語を失うこととあるが日本の学校でも可能ではないか。

以上33項目の質問、疑問点は私自身の関心も含まれている。※印がそうである。

5．アメラジアンスクールへの質問内容

訪問に先立って「私たちの疑問、質問」をまとめなおして、スクール校長の上里和美先生と代表のセーヤ・みどりさんに郵送した。

……

名古屋の街路樹もようやく色づき始めました。この度は本校の高校２年生のグループフィールドワークに関してご協力ありがとうございます。

本校紀要第41集をお送りいたします。沖縄に関する本校の取り組みが４本まとめられています。沖縄研究旅行に向けて「総合学習＝総合人間科」を設置し、年間の実践をまとめたものです。いずれも96年度の内容ですが、沖縄から考える人権・国際理解・平和をテーマにした学習と生徒会が文化祭で取り上げたエイサーの実践が掲載されています。

いままでの内容を振り返ると被害者としての沖縄が主でした。今回のアメラジアンの問題は、加害者としての沖縄とそのことに無知であった私たち自身の加害性に視点を当てることが必要と考えています。生徒とこのことで話し合いましたがまだまだ一致しません。

生徒の問題関心を「質問」という形で同時に同封します。現在中日新聞（名古屋の地方新聞）でも「二つの祖国アメラジアン」を連載し始めました。質問の数が多くなってしまいました。取捨選択していただいて結構です。

高校生たちがアメラジアンスクールに通う生徒と少しでも交流ができ、友達になれたらすばらしいと思っています。

……

私たちの疑問と関心
（アメラジアンスクール訪問での）

A．アメラジアンまたはハーフの用語に関して

1．アメラジアンの定義はどこまでですか
2．沖縄では「ハーフ」はマイナスイメージで語られているようです。なぜでしょう

B．アメラジアンの子どもたちへ

1．今一番望むことは何ですか
2．将来何になりたいと考えていますか

C．女性の問題として

1．米兵との結婚、その後の家庭が長く続かないのはなぜですか。
離婚問題に発展したときの法律、養育費など
離婚率が高いとするとその理由など
米兵との結婚件数の動向（増えている、減っているその理由）
2．米兵の日本女性に対する意識はどうなのですか
差別的な、一時的な態度はないのですか

D．アメラジアンスクールの運営と法的な位置づけ

1．助成金の支給はどの程度ですか
日本政府、沖縄県、米国政府
2．運営費をどう捻出しているのですか
3．入学希望者はアメラジアンに限るのか、学級、学校定員は
4．日本の公立学校に籍を置いて、アメラジアスクールに通うのですか
高校進学の場合公立中在籍が問題になるはず
5．カリキュラムはどうですか、日本語教育、文化、歴史といった内容はどうですか
その必要性はないのですか

E．アメラジアンの法的な地位および教育権、生存権、アイデンティティの問題

1．国籍法で二十二歳までにどちらかの国籍を選択する場合、アメラジアンはどちらを選択するのでしょう
2．アメラジアンの現状は、教育基本法の教育の機会均等の権利、憲法の教育を受ける権利が奪われていると考えますが、日本政府、文部省はどのような考えでしょうか
3．このような差別の実態をアメリカ国民、政府はどの程度認識しているのですか
4．日本人としての生存権（健康保険など）保障はされているのですか
5．他国の基地で米兵とその国の（たとえばドイツ女性）女性との間に産まれた子供の教育権、生存権に差はないのですか
6．アメラジアンの子どもたちにとっての母国語は英語と日本語と私たちは理解しています。子どもたちにはそのような自覚はどの程度あるのでしょうか

F．沖縄の基地問題、沖縄戦、歴史、平和教育、差別問題について

1．沖縄の平和教育にどのような問題があるのか、解決するためにどう考えたらいいとおもわれますか
2．アメラジアンの保護者の一人として、沖縄の基地問題、平和についての考えを差し支えなければ教えて下さい。

G．本土の高校生として

1．いわゆる「ハーフ」について、本土の高校生はあこがれさえ抱いています。沖縄では逆です。今後、私たち本土の高校生に望むことはありましたら教えて下さい。

6．アメラジアンスクールから学ぶ

アメラジアンスクールを訪れた生徒たちは、セイヤーさんから前述した質問事項についての詳しい説明を受けた。全てを掲載できないが生徒自身の観点から紹介したい。

①アメラジアンと女性問題から

○アメラジアンとは日本だけの用語ではないこと。アメリカ基地を持つアジアの国々の問題となる。
○アメラジアンの母親、子どもの教育権は、すなわち「生存権」の問題であり、日本国憲法の問題でもあること。
○「ハーフ」にあこがれを抱くことと差別感を持つことは同じ事であること。
○基地問題を女性問題と置き換えることができるということ。特に本土女性が沖縄アメリカ兵と一緒になるケースが多くなっている事実は驚きである。アメリカ志向が若い日本女性に強い。これはハーフへのあこがれを象徴しているのか。
○離婚問題は個々について調査が必要だという事。国際結婚だから離婚が多いと考えてはいけない。
○国際結婚のガイドラインが法的に整備されていないことが多くの問題を引き起こしていること。

つまり日本は、養育費についてもアメリカとの間で国際協定を結ぼうとしない。
○なぜ国際協定を結ばないのか。日本人男性のアジア諸国女性との国際結婚または買春の結果生まれた子どもに波及することを恐れているのではないかという指摘。アメラジアンの問題は沖縄だけでなく日本人男性の女性に対する意識の問題。
○人権問題に敏感なアメリカでも、ドイツと日本に対する対応に差があるという事。つまりアジア人に対する蔑視感情があるのではないかということ。

②スクールの運営について

○アメラジアンスクールは無認可の学童保育所のようで、父母の献身的な努力で運営されていること。行政はなかなか立ち上がらない。
○スクールのカリキュラムはみんなで作り上げていること。
○ダブルの教育（日本とアメリカ）を望む者は入学資格があること。開かれたスクールである。日本文化を学ぶことも目標の一つである。
○アメラジアンの子どもたちの母国語は英語語。
○政府文部省としては、日本の公立学校に通うことを前提とした対応で、壁があること。
○米軍基地の存在は複雑なようだ。基地は国際交流の場となると考えている若者が多いという事。
○真の平和は基地問題だけでなく、弱者切り捨ての社会を容認するような社会では平和は語れないこと。
○外見だけのかっこよさからハーフにあこがれることは問題があること。またハーフを一つの商品としか見ていない事。

セイヤーさんから説明を聞く生徒たちは大変真剣だった。国際理解、平和問題、人権問題がこのアメラジアンスクールに全て関わってくることを学んだ。何より子どもたちの健やかな成長を当然の権利として主張し、運動しているという自信が生徒に感銘を与えたようだ。

アメラジアンの子どもたちと実際交流ができ、彼らの目が輝いていたこと、このスクールを発展させていく主役としての自覚と学ぶ意欲、喜びが身体全体にあふれていたことなど本校の生徒たちは驚きを持って感じた。

7．沖縄研究旅行での「平和メッセージ」から

本校では研究旅行の最後の夜、各自この旅行で最も強く感じたことを「平和メッセージ」として色紙に記している。ほとんどの生徒が基地問題、ガマ体験（沖縄戦での避難場所となった珊瑚礁の鍾乳洞）、沖縄戦の体験談が中心である。しかし、アメラジアンを訪問した我がグループの面々はスクールの交流体験を書いていた。

○『小さな家のアメラジアン』20人のアメラジアンたちが集まって１つ屋根の下でそれぞれ勉強している。教科書もない、専門の教師もいない。だけど心から「勉強したい」がある。それに答えてあげなければならない。彼らのために。

○アメラジアンスクール・イン・オキナワに行って来た。アメラジアンスクールはアメラジアンにとってはなくてはならない学校なのに、日米政府は何もしてくれない。この学校は母親たちの手作りの学校です。月謝が高くて通えなくなる、公立に転校すればいじめられるのです。それなのに日本政府は公立学校へ行けととてもひどいことを言う。なぜアメラジアンの学校をつくらないのか、なぜ教育権を保障しないのか、絶対必要なことなのに。とても矛盾していることだと思う。母親たちはこれからも闘い続けていく。わたしたちにできることがあれはやりたい。私たちはずっと応援していきたいと思う。

○旅行の中で今日のことは絶対忘れない。アメラジアンスクールでふれ合った笑顔はいつまでたっても忘れない。少しだけ話してくれた小学校（公立）でのいじめの話し方の中から、私は自然にその子の悲しみの全てを感じとれた気がした。私は絶対にこれだけで終わらせたくない。どんな小さな事でもよいので少しずつ広めていこうと思う。
沖縄に来て本当に良かった。今日までの自分を振り返ることができた。全てが私の中に入って戦争の間違いを心の旅から知ることができた。一つ一つがこれからの私を変えることは間違いない事だと心から誓える。沖縄の真実を語り続けていきたい。

○沖縄研究旅行で一番思い出に残っているのはアメラジアンスクールでの子どもたちとの交流。彼らはアメラジアンであることで自分が誰なのか、また何のために生まれてきたのか、学校や社会のいじめに悩んでいた。しかし、今の彼らは自分の居場所と友達をみつけることができた。だから今日見た笑顔がとても純粋で輝いていて私の心の中に強く残っています。（中略）私はこの４日間の体

験を無駄にしないように色々な人に沖縄の全てを話していき、また、沖縄の抱える問題の意識を深めていきたい。

フィールドワーク実施の夜、これらのメッセージはグループ一枚の色紙にまとめられた。書き終わったのは就寝時間がとっくに過ぎた翌日未明だった。

8．行動に移した生徒たち

名古屋に戻り2学期末試験、生徒会など生徒も多忙となり、なかなかまとめの作業に移れなかった。私自身、アメラジアンスクールで生徒が受けた一連のショックは一時的なもだったかもしれぬと正直がっかりした。しかし、生徒間ではかなりアメラジアンが話題となった。教育テレビでも取り上げたこともあり、グループで視聴した。白い2階建ての民家のスクール、交流した子どもたち、お話を伺ったセイヤー・ミドリさんなどなつかしい場面が目に入ってきた。ＮＨＫが取り上げた視点と生徒たちの問題意識にほとんど差がなかった。

ある生徒が「募金をしてアメラジアンスクールを支援したい」といいだした。早速ポスターを作り、チラシを全クラスに配布して、朝礼の場で全校生徒に訴えることになった。短期間の訴えにも関わらず六百名余生徒で約二万二千円、募金が集まった。わずかだが生徒たちの充実感は予想外だった。

「学習が行動化につながる」これは押しつけではできない。

9．人生選択への関わり

総合人間科の学びが高校生の人生・進路選択にどう影響を与えているのか。アメラジアンに取り組んで半年過ぎた高3の今、生徒たちにとってあの体験はどのような意味をもっているのか。

Ｋさんは次のように書いている。

「私たちの班は、アメラジアンという難しいテーマを調べることになった。このテーマが決まってから私は毎日毎日アメラジアンの本を読んだり、新聞の記事を切り取ったり、インターネットで調べたりしてアメラジアンについて少しでも知ろうと努力した。でもこういう調べ方だと文字として分かるだけで、人間が伝わってこない。私は「かわいそうだな、なんてひどい」という同情だけで自分とは関係のないところとして突き放してみていた。

ところが実際にアメラジアンスクールを訪問し、子どもたちとふれ合う中で、自分の将来を考えるきっかけを掴んだと思う。

私は高校には行ってから保育士を考えて将来の目標としていたが、私の知っている限り今の大学生のように毎日バイトだけの生活ならば4年間がとても無駄なので早く仕事をしたほうが良いのではないかとも思っていた。そんな時私たちはアメラジアンスクールの子どもたちのために本校の全生徒に募金を訴えた。誰かのために何かをしようと思ったのは初めてのことだった。またこの募金をやり遂げたとき、どんな小さな事でも自分にプラスになっていくことも初めて知った。そしてこのことを知った時、自分の進路をはっきりと決めることが出来た。4年制の大学へ進学して大学に行って保育士の資格を取って短大では学びきれないことを学ぼうと思った。またボランティアにも力を入れたい。目の見えない子どもたちに色々な本を読める喜びを与えるために点字訳のボランティアをしようと思っている。

やはり自分の生き方に影響を与えたテーマだった。」

Ｋさんらしい受けとめ方といえる。アメラジアンが抱える「教育権、女性、基地、平和」などの基本的人権の問題を正面に据えるのではなく、保育士という職業選択と「誰かのために何かをしたい」と点字訳ボランティアという具体的活動を描くことができた。これも、自分たちの体験、学びを全校生徒に訴え行動をおこし、みんなの理解を得たこと、これが生き方に大きな影響を与えていることがうかがえる。

10. 自分が変わった―ある女性徒の記録―

アメラジアン問題を取り上げる中で大きく自分を変えていった生徒も多い。次に紹介する女性徒は、アメラジアン問題を自分の考え方の出発点として女性、性、アジア、男性、国家を考え始めている。つまり彼女の生き方の原点を自分で学びとったのだろう。

次の文は彼女が3年生に進級してから、再び自分にとってアメラジアンとは何であったかを振り返ったものである。

「私、何人（なにじん）に見える？」の言葉は一生忘れないと思う。アメラジアンスクール訪問後立ち寄った沖縄の海はすごくキレイだったのに涙が出てきた。友達にバカにされても涙は止まらなかった。私はその時ただ漠然とアメラジアンの問題をもっとより深く知りたいと思っていた気がする。

今高3になって研究集録（高2総合人間科の生徒研究論文集）を改めて読んだ。同じテーマで取り組んだもう一つのグループ（文末の、補―もう一つのアメラジアングループ―参照）が出した結論の壁に何度もぶちあたったからだ。―私たちがアメラジア

ンを特別視することが差別を生む遠因になっているのではないか？―そう思う度に私は調べることが苦痛になり迷いが生まれ途中で投げ出したくなる事ばかりだった。

しかし、沖縄に出かけてアメラジアンスクールを訪問し新しい考え方が私の中に生まれた。現にたくさんのアメラジアンの家庭で国内法が整備されないために苦しみ、泣いている母子がいる。確かに特別視すればそれは差別問題にもなりかねない。しかし今日本の国内法改定を考えなければ、永遠にアメラジアン問題は解決しない。

こう考えたときから、私は常に心のスミにアメラジアンのことを置いて物事を考えるようになったと思う。

国内法の整備改定について私は別の面から調べてみたりもした。たとえば日本人男性の買春ツアーについて。

日本政府が国内法整備改定に踏み切らないのはこの買春ツアー（たとえばフィリピンなど）で生まれたジャピーノと呼ばれる日本人男性と現地女性の間の子どもたちの責任問題に発展することを恐れているからだとも言われている。そして私の調べた売春の事例の中からフィリピン、タイで売春をしているストリートチルドレンの中にはジャピーノやアメラジアンも含まれていることが分かった。

私はこの時、国内法制定が絶対必要であると同時にアメラジアンであってもジャピーノであったとしてもストリートチルドレンであったとしても人間としての誇りを持つこと、自分に自信を持つことを忘れないで欲しいと思った。私で良ければそれを取り戻す為の手助けをしたいと思った。

アメラジアンスクールを閉鎖的と批判する声も聞いた。自分にはそう結論づける力はないが、私の知る限りアメラジアンスクール・イン・オキナワの子どもたちは決して閉鎖的ではなかった。

むしろそこにいることで自信を取り戻せている子どもたちの方が多いと感じている。

もう一度アメラジアンスクールへ行きたい。

（1999.6.10.　高3 Y.H）

11. 真の「国際理解教育」とは

アメラジアンは日本の公教育に大きな課題を投げかけた。多文化教育を受け入れない体質が公教育に在るとするなら「国際理解教育」はお題目に終わるに違いない。総合的学習という名の下で、小学校に英語教育が導入されようとしている。子どもたちが英語に触れることがコミュニケーション能力を高め、国際理解が進むとするならば余りに短絡的である。

アメラジアン問題は沖縄に留まらず、ブラジル日系の子どもたちなどのニューカマー、在日韓国・朝鮮人、中国帰国の子どもなど教育における多文化性を避けては通れない。こうした子どもたちを公教育が受け入れるカリキュラムの中核に国際理解教育や総合的学習が位置づけられるべきであろう。

本校の中高一貫新カリキュラム構想では、総合学習としての「総合人間科」の他に中２～中３、高１～高２にかけて異年齢で学ぶ新教科を開発中である。そのひとつに「国際コミュニケーション学」と「平和と共生の科学」がある。これは米田伸次氏（帝塚山学院大学）が主張する「国際理解教育」と合致するものである。多様な文化、民族を認め共生することで平和な社会を創り出していくのがねらいになる。

氏は、国際理解教育とは「平和の文化を創る人間」づくりがユネスコの提起する21世紀の教育の柱であると述べている。（日本教育新聞1999.5.21）

アメラジアン問題は我々の国際理解教育への猛省を促すと同時に、これからの教育の在り方となる「人権」「平和」「共生」「多文化」をコンセプトとしたカリキュラムづくりへの課題を突きつけている。

セイヤー・みどりさんを中心とするアメラジアンスクールの教育課程・経営は、こうした点からも注目されている。アメラジアンの母親たちが進める学校づくりの中に「21世紀の日本の教育の在り方」が示唆されていると感ずるのは私だけではない。

参考文献

上里和美　『アメラジアン－もうひとつの沖縄－』（かもがわ出版1998）

イ・ヨンスク「目の狩人、耳の旅人」（沖縄タイムズ 1998.9.26）

安彦忠彦、丸山豊「中高一貫カリキュラムの可能性」（名大教育学部紀要－教育学－第45巻第２号　1999）

補１．もう一つの「アメラジアン研究」グループ

私が担当した以外にもう一つアメラジアンをテーマとしたグループがあった。そのグループとは、テーマこそ同じであったがクラスが違う、人間関係の複雑さ、指導教官が違うという問題も絡んで、合同で研究することができなかった。この班はアメラジアンスクール訪問も私が指導した班が優先されたため（人数の関係で）実現できなかった。彼らは私が担当したグループに比べると常に意欲的だったがアメラジアンスクール訪問を断念し現地調査を行った。アメラジアンについて沖縄での路上アンケートと聞

き取りを中心とした研究となった。現地の子どもたちとの接触がなかった故か「アメラジアンの問題は個人的な問題」と結論づけたようである。アメラジアンという用語が定着していない時、「アメラジアンについて知っていますか」の通行人一般への問いかけは困難を極めたらしく、実態をつかめなかったことが悔やまれる。

二つのグループを比較し評価するわけではないが、アメラジアンスクールの真只中にいる子ども、親たちの生の声とその実態に触れたことが生徒を変え行動に移させ学校世論を巻き起こしたのではないか。

これは総合学習の一つの在り方を示している。

補２．1999年９月11日付
朝日新聞の『ひと』欄でセイヤーみどりさんが紹介された。

それによると、アメラジアンスクールへの通学を義務教育上の出席として宜野湾市が二学期から認めることを決めたということである。